

Title	心理療法における「理解」：共なる体験をめぐる
Sub Title	"Understanding" in psychotherapy : the experience of sympathy
Author	三木, 都(Miki, Miyako)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1990
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.30 (1990. ) ,p.29- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000030-0029">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000030-0029</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 心理療法における「理解」

—共なる体験をめぐる—

## “Understanding” in psychotherapy

—The experience of sympathy—

三 木 都  
Miyako Miki

This paper examines the meaning of “understanding”, which is essential to psychotherapy. Until now this topic has been discussed from the standpoint of natural science. However, the approach of natural science is not appropriate to psychotherapy, because the process of psychotherapy occurs between two human beings. Accordingly, a phenomenological approach is taken in this study.

To examine “understanding”, I describe the case study of a play therapy of one duration with a 9-year-old girl. In this case, “understanding” was accomplished as a synchronic experience between the client and the therapist. Following this experience, the personality of the client changed gradually. In the final section, this significant experience is considered as something transcending the framework of modern science.

### はじめに

心理療法 psychotherapy において治療者は「わかっ  
てほしい」と述べるクライアントに出会うことがある。  
また治療者側にしても、クライアントを「わかる」「理  
解する」ということを重要なこととして語ることが多い。  
このように、治療においてとりわけ重要であると思  
われる事柄が「理解する」「わかる」という言葉で表現  
されることは少なくない。言い換えれば、心理療法の治  
療はクライアントが「深くわかってもらった」と感じる  
ところから始まっているとも言えるのである。本論にお  
いては「このような心理療法における「理解」がいかな  
るものを意味するのか、また、それが重要なことになっ  
てくることにはどのような意味があるのかについて論じ  
ていきたいと思う。また、このテーマを論じるにあたっ  
ては、心理療法という一つの知の在り方が近代科学の枠  
を越えるものであり、従来の学とは異なる把握の仕方が  
必要であることも浮き彫りになってくる。この点も合わ  
せて述べていきたい。

問題を整理するために、「理解」についてを簡単に素  
描してみることにしよう。心理療法の本質と結び付いた  
「理解」とは、クライアントの話す内容を理解しクライ  
エントの感情に共感しようとすることによって成し遂げ  
られるのであろうか。これについての答えは否である。  
一見、クライアントの中へと入りこみ、クライアントと  
の心的距離を減らすことによって相手を理解することが  
可能なようにも思える。確かに心理療法においては、そ  
のような態度を心掛けることは必要であるが、実際に  
それが完全に行われ得るかということになると、それは  
不可能なことの方が多いであろう。治療者はただ、そ  
のような態度をつねにとろうと努力するだけである。

それでは、逆に心的距離を遠くにとってクライアント  
のある人格理論にあてはめることで理解するやり方はど  
うであろうか。この方法は、クライアント自身が気がつ  
いていないようなパーソナリティについての知識を理論  
によって得ることができるという点では、前に述べた共  
感による方法よりもその人についての多くを理解するこ  
とができるといえよう。しかしながら、実際はクライエ

ントの悩みがあるコンプレックスに関連があるものであると理解しただけでは、心理療法の過程はすすまないものである。治療者は暗中模索の心理療法の過程の中でそのような理論によって多くのことを得るのであるが、それがすなわち、心理療法の本質と深く結び付いた「理解」であるとはいえない。

心理療法における「理解」が、心的距離を減じ、相手と同一化することによっても、またクライアントを対象化して一般化された理論に位置付けることによっても為されないとすると、我々の問題意識は袋小路に陥ってしまうのだろうか。ここで、再び臨床実践における洞察にもどって問題を検討してみると、次のようなことが考えられるのである。すなわち、治療者側の態度に還元できないような事象、法則や条件として語ることでできないような事象が心理療法において生起し、それが心理療法の本質とかがわる「理解」へ、ひいては治療へとつながっていくのではないだろうかという問いである。本稿においてはこの問いにしたがって論を展開していきたい。またこのような問い方をすることは、従来の近代科学の枠組みにとらわれず、不断の臨床実践をみつめなおすことにもつながることであるように思う。

## 1. 方法論の検討

### 1-1. 心理療法の状況

心理療法の本質とかがわる「理解」を論じるためには、心理療法の状況、そしてそこでなされる治療者とクライアントの関係がいかなるものであるかを考えていかななくてはならない。この状況を把握することによって、心理療法が他の科学と異なる状況のもとに立地していることが明らかにされ、目的とする「理解」を捉えるためにはどのような方法論が必要になってくるのかについての多くの示唆が得られるであろう。

人間についての学において、最も問題になることは、それがものを対象にした時のような主体-客体の関係ではなく、各々が主観をもつ主体-主体の関係であるということであろう。そして、心理療法においてはそのような状況が一層際立っており、またその状況によってのみ治療が起こるともいえるのである。

心理療法は、悩みや問題を抱えている人がそれを理解しようと望んで、治療者のもとを尋ね、治療者がその問題を共に解決するために援助をしようとする関わりである。その場合、治療者の側がクライアントについて知ることができるものには、さまざまなレベルのものがあるといえる。まず、一つには知覚による観察である。クラ

イアントが面接の場面でどのように行動するかを治療者は観察によって理解することができる。しかしながら、この行動の観察は誰によっても同じように観察できるものにとどまっている。次に、よりクライアントと関わったレベルにおいては、治療者がクライアントの語ることにについて自ら内省し、共感することによって、クライアントの主観の世界の内的な意味付けを知ることができる。この内省や共感による理解には誰にでもできるもの(例えば、恋人に振られて悲しい)といったことから、より共感能力のある人にもみ理解できるものも含まれているであろう。

しかしながら、内省や共感によって得られるものが何であるのかを明確にするのは難しい。なぜなら、心理療法においては内省、共感によってさらにこころを開いた関わり方をすることによって、より深い理解へと到達するように思えるからである。それは一言で言って、無意識のもの、通常の意識では気づかれないものであるといえる。心理療法においては、通常では意識されず、明確な意味も把握されないような事象であるが、なぜか重要な意味も持っていると考えざるをえないような事象、それが治療者とクライアント双方にとって意味深いものとして体験されるのである。そして、そのような関わり方においては、もはや独立した主体と主体の関わりという在り方を越えて、主体と主体との交錯といえるような関わりが生じていると思われるのである。次にそのような事象の例として河合隼雄の紹介する遊戯療法の事例を挙げたいと思う<sup>2)</sup>。

クライアントは7歳11か月の精神薄弱の男児である。彼の発達年齢は1歳9か月で非常に低く、そのため他の子どもたちと遊んだりできないので、ほとんど家にこもりっきりのような生活を送っていた。さて、この子と遊戯療法を続けて7回目の時、治療者にとって心をうたれるような事柄が起こった。それは、この子が遊戯療法の場面で、熊のぬいぐるみの首を綱でくくり、それを連れて歩いた後に、その綱を誇らしげに解くという遊びを繰り返したことであった。治療者はその時、意味は明確にはわからなかったものの、何か胸を打たれるものを感じて、強い印象をうけたのだという。このことをその子の母親と話し合いをしているカウンセラーに告げると次のようなことがわかった。最近、その家にどこからともなく犬が迷いこんできて、子どもがそれを喜んで飼っていた。ところが、母親が外出からもどってみると、犬がいない。探さなくてはというと、留守番をしていたその子が探さなくてもいいという。母親は不思議に思ったの

であるが、後からわかったことによると、その犬は近所の犬が迷いこんできたもので、その飼い主が探しあてて、返してほしいとってきた。その時に留守番をしていたその子は、この人の話を理解し、非常にかわいがっていた犬を自ら連れていき、首の鎖を泣きながら解いて返してきたのだという。今まで話もろくに理解できないと思っていた子どもが、このように近所の人の話を理解し、あれほどかわいがっていた犬を自分で返しに行ったことは、母親にとって大きな驚きであり、喜びであった。

この遊びは、子どもが行なった大きな仕事を治療場面で再現して、それを治療者に伝えようとしたものと考えられるが、果たしてそれだけの意味しかもたないものなのであろうか。それに対して河合は、そこにはその子にとって重要な「繫縛を解く」というモチーフが生きて表されているのではないかと考えている。そこで、河合は治療者にそのころにその子どもの「繫縛が解かれる」ようなことが起こったのではないかと尋ねると、治療が始まる前は、知恵おくれの子なので、お母さんもなるべく外に出さないように子どもを育てていたという。しかし、治療に通ううちに、お母さんもだんだんと考えも変わり、またこの子どもの成長ともあいまって、子どもが喜んで外の人と接触をもちはじめたのがちょうどこの頃であったのだという。つまり、この子の遊びには、家から自由に開放されたことや、可愛がっていた犬を悲しみをこらえて近所の人に返したという満足感などが集約的に表現されているのである。

この事例で目をひくことは、この子どもが熊のぬいぐるみの綱を解くという遊びを繰り返した時、治療者はその行為に何となく胸を打たれ、強い印象を受けているという点である。つまりこの事例から、自らの心を十分にひらいてクライアントに接することによって、深い感情のつながりが生じ、そこから生まれる手掛りによって、より深い心の内面、深い意味が語られるということが推察されるわけである。そして、このような深いかかわりが生じている時には、治療者はその場で起こる事象を観察しているという次元を越えて、その場をクライアントと共に生き、経験しているといえるであろう。この意味において、治療場面は「主体と主体の交錯」ともいえる状況になっているのである。

## 1-2. 自然科学的方法の陥穽

そのような深いかかわりを学問として論じるにあたってとられてきたやり方は、自然科学の方法を模倣することであった。現在の精神分析ないしは精神分析的な心理療法の

礎を作ったフロイト Freud, S. も、自然科学的方法を全面的に深いこころの世界に適用することによって精神分析を創始したといえる。この自然科学的方法とは、主体と対象が独立することを前提に、対象において繰り返し起こってくる事象を法則として定立することをめざすものであり、19世紀から20世紀初頭にかけての時代精神ともいえる思想であった。しかしながら、前節で述べたような心理療法の状況において、自然科学的思考法のみ頼って心理療法を行なおうとすることには以下のような陥穽がある。

そのうちの一つは、主体と対象を独立したものとして理論化し、そこに現われるもののうち、反復するものを捉えようとする態度である。フロイトは患者には「外科医を模範として」<sup>3)</sup> 接することを説いているが、これはフロイトが治療的禁欲を強調する以外にも、主体と対象の独立という自然科学の方法を模倣することによって、精神分析を学として成り立たせようとした意図が現われているといえるであろう<sup>4)</sup>。精神分析における転移の概念もこのような背景のもとに構築されてきたといえる。分析家は、患者が幼児期体験に基づいて分析家に向けてくる感情であるところの転移を解釈し、意識化させることによって治療を行なおうとする。その際の転移は、フロイトにとっては反復するものであり、それゆえ冷静な態度で取り扱わなければならないのである。しかしながら、後のユング Jung, C. G. やフロイト派の修正にもよるように、このような態度は真の治療的態度を反映しているとは言い難い。この点に関して精神分析を現象学の立場から把え返したビンズワングー Binswanger, L. は次のように述べている。「(医師と患者の間の)この交通は、正統精神分析学者たちが考えているように、たんなる反復、つまり陽性の場合、転移と逆転移、陰性の場合、抵抗と逆抵抗というふうに考えられてはなりません。むしろ患者と医師との相互関係には、つねに独自の新しい交通形態が表現されているのです。」<sup>5)</sup> つまり、治療者と患者の間には幼児期体験に基づいた転移が繰り返されているのだとして、その関係を客観的に眺めるのではなく、それがこの治療者との関係において、克服されるか否かが重要なものであり、この意味において転移は単なる繰り返しではなく、「純粹に共人的関係」と言えるのである。それゆえ、「転移」が単なる繰り返しであるとしてそのかわりに積極的にかかわろうとしないのではなく、それが反復的な歪みの様相を呈しているとしても、その事象の独自性、一回性にも目をむける必要があるのである。そして、またそのような見方を持つこ

とによってのみ、治療者は患者とのかかわりに自らを深く関与させることができる。安易に患者に巻き込まれることが治療の妨げになることはフロイトの述べた通りであるが、河合の述べるように「治療者がいわゆる『客観的』態度をとるかぎり、患者の自己治療の力が働きにくくなり、治療は進展しない」<sup>9)</sup>のである。

このような自然科学的思考を心理療法の理論に取り入れることによって生ずる問題は、熟練した治療者にとっては、「理論以外の臨床的感覚」によって補われているようである。しかしながら、それが自然科学の強引な適用によって生じているものであるという一つの要因が明らかにされている今、これらを積極的に見直し、自然科学的前提を現象に即して検討しなおしていくことが必要なのではないだろうか。

自然科学的思考法に頼って心理療法を理論化することが引き起こす第二の弊害は、実存についてである。この問題については、ビンズワングァーがフロイトの理論構築について明晰にその問題点を述べている。それによると、フロイトの関心は自然科学の方法にのっとり「心的装置の個々の作業様式の仮定された『過程』を説明す」<sup>10)</sup>ることにあつたために、われわれが身体やこころ Seele に対して、何らかの態度をとっているということ、ひいてはこのような態度をとり得るという自己についての「存在論的問題圏全体」<sup>11)</sup>が度外視されているという。つまり、それは一言にして「実存を自然史として解釈しなおす誤り」<sup>12)</sup>であるという。

この指摘は非常に重要なものであるといえる。なぜなら、われわれはしばしば、クライアントの抱える問題を、こころの健康を取り戻すという名目だけでは取り扱えないように感じるからである。あるクライアントの悩みが、健康や正常であるということを越えて、その人自身の生き方の問題であると思える時、われわれはフロイトの呈したような実存までも自然史として捉えるやり方とって、治療モデルにおいてその人を捉えることはできない。そこにおいては、実存についての理解が不十分であるからである。フロイト自身は臨床実践において、人間に対する理解、ひいては実存に関するこのような理解の仕方を十分持っていたように見える。しかしながら、そのような人間に関するフロイトの鋭い理解は、自然科学的方法による理論化によって、むしろ歪められているのである。

### 1-3. 現象学的方法

深いこころのかかわりを捉える方法として自然科学的方法が不十分であることは上で述べた。それでは、われ

われは心理療法の本質とかかわる「理解」を捉えるにあたって、いかなる方法をとることが望ましいのであろうか。

その問いに答えるものとしては、現象学の方法を挙げることができる。現象学の問題意識とは、「Descartes 以来の心身二元論、ここに由来する哲学と経験科学の完全な分離、経験科学すなわち自然科学と言わなければならないような画一的自然科学主義などを超克することを必要としている“ヨーロッパ諸学の危機と心理学”についての革命的情熱と危機意識」<sup>10)</sup>であつたといえる。つまり、「自然科学の方法を無条件に踏襲し、その認識論的前提をそのまま引き継ぐことによって、『経験』とか『事実』というものをきわめて狭隘なかたちで受け取る」<sup>11)</sup>ような学の在り方に対する疑義である。このような危機意識のもとに生まれた現象学は、自然科学の方法に頼って心理療法を学として形成していこうとする時に起こる弊害を乗り越えようとするものであり、実存をも扱うような志向性をもつものである。

では、このような現象学とはいかなるものであるのだろうか。我々は、それをフッサール Husserl, E. が初期に考えたような体験の記述的研究であると捉えるのではなく、後期のフッサールの考えに依拠し、われわれが持つ自然的態度から、よりそのものの本質があらわになるように見方を変更していくこと（自由変更 freie Variation）であると捉えることにしたい。つまり、具体的な状況から出発し、本質直観によって先取的に得られた認識に基づいて、常に見方を変更していくことである。心理療法における「理解」の問題を取り扱うという本稿における目的のために、その具体的な状況とは、すなわち治療場面であり、また、自然的態度とは、通常あてはめられることの多い自然科学的な見方を指すことになる。

それでは、ここで自然科学的方法に依拠するこころの学と、現象学に依拠するこころの学との違い、そして、具体的には現象学的方法による心理療法についての見方がどのようなものに注目するものであるのかを述べよう。自然科学的方法による心理学は対象となる人間を多数集める傾向にある。このようにして集められた人は「無人称的な性格をもったひと」であり、簡単に「彼、彼女」といってすませられるひとである。そこから、自然科学における客観性<sup>12)</sup>が得られるように手続きを踏み、そこに現われる反復するもの、繰り返すものを法則として定立することを目的とする。つまり、観察者と観察されるものとの関係はあくまで三人称的なものにとどま

る。それゆえ、このような自然科学によるこころの学を「三人称心理学」と呼ぶことができるであろう。

それに対して、現象学的方法によるこころの学、とりわけ、心理療法についての学は、治療者とクライアントとの間におこる事象を重視し、その事象の本質が明らかになるようなかたちで、その事象へと向けるまなざしそのものを変更していこうとするものである。そこには、法則として定立されえないが、一回的に重要な意味をもつ事象があり、そこにおける治療者とクライアントとの関係は相互の主体を交錯するような在り方であり、治療者にとってクライアントはかけがえのない「あなた」として存在する。その意味で、現象学による心理療法についての学を「二人称心理学」と呼ぶことができる。

二人称心理学に基づく立場で心理療法を論じる場合、具体的には、治療者とクライアントとのかかわりにおいて、クライアントがどのような態度を治療者に向けてくるのか、そして、それによってその状況がクライアントにとってどのようなもの変わってくるのかに注目することが重要となる。つまり、人は生きている状況に対して何らかの態度をとっているが、その態度は別の態度へと変わる可能性を含んでいる。この態度が、治療者とかわることによってどのような方向へと向かっていくかに注目することが、クライアントの実存の志向性へと着目することになる。クライアントはその生きる世界へと新しい態度でやりわり始める前に、治療者の前にその態度の萌芽を示すのである。

## 2 現象学的方法による「理解」

### 2-1. Aちゃんの事例から

心理療法において起こる事象を現象学的に捉えることによって、その本質と結び付いた「理解」が明らかになるらしいことを述べた。本節ではその観点から具体的に小学校三年生の女兒「Aちゃん」との遊戯療法の事例を呈時し、そこに現われる「理解」が何であるのかを考察することにする。

Aちゃんの母親が病院に尋ねてきたのは、五月の連休が開けてすぐのことだった。Aちゃんは2～3月頃から元気がなくなり、昼間から「疲れた」と言って布団にもぐりこんで、涙を流すようなことがあったという。5月になって、登校したがいなかったり、夜眠れなかったりということが続き、母親が心配して病院に相談に来た。そこで、次の週から、筆者(事例中 th)がAちゃんと遊戯療法を行ない。母親が別の担当者とAちゃんのこと

について話し合うことになった。母親によるとAちゃんは勝ち気でひがみっぽいところもあるが、とりあえず何でもこなすお姉さんタイプであるという。

始めプレイにおいて、Aちゃんは th にあわせてその出方を窺うような遊び方であったが、慣れてくるにつれ砂の中に人を埋める攻撃的な内容の箱庭をしたり、オセロゲームではものすごい気迫で th を打ち負かそうと突っ張った態度で向かってきた。そのエネルギーはすごいものであり、th 自身つもりはなくても負けてしまうほどであった。このようなAちゃんの態度は家でのきょうだいとかかわり、学校での友達とかかわりを反映するものであるように思う。Aちゃんはきょうだいのうち上から二番目であり、三つ下の妹や2才の弟のように母に甘えることができず、4つ上の姉と張り合うようなかたちでこれまで頑張っていたという。両親の関係はあまりいいものとはいえなかったが、母からみてもAちゃんは父に似ており、「よくわからない子」とであるという。このような中でAちゃんは頑張っってよい子になることよってのみ、母親に認められるようになっていたであろう。

そのようなAちゃんの態度はプレイにおいて次第に変化してきた。th の顔を絵にかいたり紙風船の打ちあいをして全力を出し切ったのびのび遊んだりして、th と少しずつ触れ合ってくるようであった。やがて、Aちゃんは夏休みが終わりに近づく頃、今までにはないようなのびのびした「夏休みの絵」を描いた。この時、絵を描くことが非常に苦手であった th も、プレイの中で絵を描くことが楽しいと初めて実感できるような絵を描いている。

この絵を描いているプレイの途中、思いがけないことが起こった。プレイの間は母親との平行面接が行われており、母が共に連れてきた妹弟は待っているのが普通であったのだが、なぜかこの日は待つことにあきらめた妹がプレイの部屋へ侵入してきたのである。Aちゃんは妹達をなんとか部屋から追い出そうとするが、機嫌を損ねた妹はここで出ていこうとしない。th はAちゃんの側についていようとするものの、かといってあからさまに妹を叱って外へ出すわけにもいかず、Aちゃんの家での母親のようにきょうだいに取っ組み合をされる格好になり、困った。そしてのびのびした「夏休みの絵」を描いていたAちゃんはその状況にとらういらいらして、絵に登場する男の子の髪の毛をはみ出してぬり、女の子の顔をぬりつぶして、「男の子はつぶばりになってしまいました。女の子は仮面の顔になってしまいました!」

と言って絵を投げ出してしまった。th はAちゃんが普段妹や弟の前では「つっぱり」の「仮面」をかぶっていなければならないこと、そしてそのためにAちゃんの可能性が阻害されていることを、この状況を前にしてまざまざと感じたのであった。

th が期せずして母親の役をとったこの印象的な出来事をきっかけに、プレイの過程はさらに展開をみせた。Aちゃんはより th とのかかわりにおいて母親的な甘えを求めるようになってきたのである。そして、それに平行するように家庭においても、Aちゃんの甘えが少しずつみられるようになってきた。Aちゃんはよく食べるようになり、顔がふっくらとしてきた。父と母の関係も改善されつつあり、この頃母親は「ようやく夫婦らしく、家庭らしくなってきた」と述べている。

甘えの時期を過ぎると、Aちゃんは燃料を補給したかのようにまた、頑張る態度をみせ始めた。それにつれてプレイでの遊びも再び競争的なものになっていった。Aちゃんが甘えられるようになり、母親の接し方に工夫がみられるとはいえ、家庭でのきょうだい間の状況は変わることはなく、ある程度頑張ることは仕方ないのであろうかと思しながら、th はAちゃんの無理に頑張ろうとする様子にいたいけな感じを抱いていた。

そのまましばらく様子を見ようと考えていた th であるが、しばらくするとAちゃんの頑張りは一段落し、再び甘えることがプレイで目立つようになってきた。そのような安心感の中でAちゃんは、学校と病院と自分の家が写っている航空写真をもってきて th に見せたり、プレイの中でいちばんよくできた紙粘土のアヒルを th にくれたり、プレイに来ていたことの意味をこころに繋ぎ留めているようでもあった。そして、来所から一年たった5月のある日、もし何かあって来たいことがあったら来るというかたちにして、一応の終わりとなった。それから4ヶ月がたつが、やはりこの時が終結となったようである。

この事例からわかることは、プレイの中の転回点となった出来事をきっかけに、Aちゃんのこころが求めていた深い可能性が明らかになってきているということである。Aちゃんにとってそれは、甘えに表現されたような母親的なものを求めることであったといえるように思う。そして、そのようなかかわりが th との間で可能になったのは、Aちゃんと th が共に今までに描いたことがないような絵を描き得たということ、そしてそれに引き続いて起こった、妹と弟との th との取り合いという

かたちで th が母親の役をになったことが大きな意味があったように思う。

Aちゃんが今までにないようなのびのびした絵を描き、th も絵で何かを表現するというを初めてすることができたということは、単なる偶然であると片付けられるかもしれない。しかしながら、これは深いかわりの状況において今まで現われていない可能性、無意識としての可能性を同時にかいまみることのできた体験であり、それ以降の事例の展開の様子を考えると非常に重要なものであったといえる。つまり、ここにおいて、心理療法の本質と深くかかわった「理解」は、お互いの無意識の可能性を同時に各々が開けひろげるというかたちで可能になっているのである。そこにおける「理解」は、どちらかがどちらかを理解するというようなかたちではなく、各々が同時に自らを越えるような「共なる体験」の中で成し遂げられたといえる。

このような「共なる」性質を持つAちゃんの絵について、少し述べよう。この絵は海辺で実のなったやしの木の下で、男の子と女の子が木に寄り添うようにして遊んでいる絵である。空には雲がむくむくとわいており、上に大きく「夏休み」とかかかれている。この絵のモチーフを象徴として理解すると、実のなる木や、海は母なるものを表し、そこに寄り添う子どもは新たな可能性の誕生としてとらえられるかもしれない。このような意味でこの絵には母子一体感が表現されているともいえるであろう。

事例に見られるようにプレイにおける変化はすなわち、Aちゃん自身の新たな可能性、実存の志向性を示すものであり、それは th との「共なる」という性質のかかわりから生じたものであった。次にはその「共なる体験」についてさらに述べる。

## 2-2. 「共なる体験」

さて、このような「共なる体験」は一体いかなるものなのであろうか。Aちゃんの絵と th が初めて絵を描くことを楽しいと感じた絵が同時に起こったということは、単なる「偶然」であるのだろうか。自然科学的な因果連関で考えるならば、このような事象は「一回的」に起こっただけであり、そこに意味があるとは捉えられないであろう。しかしながら、この出来事が治療の転回点であり重要な意味があったという事例への本質直観に基づいて、さらにこの問題を考えていくことが重要だと思われる。

自然科学の見方にのみとらわれることによって心的現実が損われることを拒否し、こころの世界に深く関与し

ていったユンクは、このような事象を積極的に取り上げていった。彼は無意識において、同一または類似の意味をもつ二つあるいはそれ以上の事実が、時間的に一致して生じる事象を「共時性 synchronicity」の原理によるものと考えた。自然現象には因果律によって把握できるものと、因果律によっては把握できないが、共時性の原理によって把握されるものがある。そして共時性の原理に従って事象を見る場合には、因果律に従う時のように原因から結果を考えるのではなく、同時に起こってきたものが何であり、それがどういう共通の意味をもつかということが焦点となる。その事象が作り出す相や布置 constellation といった全体的関連を見るのである。このような事象は一言で言って「意味のある偶然の一致 meaningful coincidence」であるといえるが、このような観点からAちゃんの事例を再度みてみよう。

Aちゃんが今までにないのびのびした「夏休み」の絵を描いたことと、治療者が初めて絵を描くことが楽しく感じることができたことは、共に新たな可能性を生きるという「意味」における「偶然の一致」であるといえる。そして、Aちゃんにとって、新たな可能性とはまさに、母なる世界の中で生まれ、甘えることができるということであった。このようにその時の状況の布置を捉えると、Aちゃんの妹と弟がプレイの部屋に入ってきて、治療者が母親の役を演ずることになったことも単なる偶然ではなく布置をかたちづくる一部であったわけである。妹弟のいるところでは母に甘えられず、むしろ強がった態度をとって無理に頑張ってきたAちゃんが、初めて妹や弟に向かって母としての治療者が自分についてくれる存在であること、それを誰にも邪魔されたくないことを表現しえた体験となった。つまり、ここにおいてすべての布置を貫く意味とは、母なるもののもとで新たな可能性を育むことであったと言えるのである。

「意味のある偶然」として生じた心理療法の本質とかわる深い理解は、もはや個人のレベルを超えているかのように思える。この点についてプロゴフ Progooff, I. は「そのような時、個人はあたかも自分が一瞬間、存在の高い次元に移されてかのように感じる」<sup>14)</sup>と述べている。しかしながらこのように述べてくると極端なことをいえば、治療者の側がその「意味」を過剰に読み取っているだけであって、そのようなことを考えはじめればすべてのことが「意味のある偶然の一致」として生じてくるであろう。これについて河合の述べていることは簡潔である。すなわち、「多くの共時的現象につて、個人がどれほどの意味を感じ、どれほどその追及にコミットし

ていくかが問題であって、それが共時的現象かどうかなどという問いかけはあまり問題にならないのである」<sup>14)</sup>つまり、事例でのその「意味」を捉えうる主体、それを心的現実として信ずる人間がそれに基づいてコミットできてこそ、初めて共時的現象が生きたものになるわけである。

### 2-3. 近代科学と臨床の知

「意味」を捉え、それを心的現実として信じ、コミットしていく人間として治療者が位置付けられるとすると、それはもはや狭義の「科学」の枠を越え出で、むしろ宗教であると感じられるかもしれない。心理療法を誠実に実践していくと、通常の科学の範囲で語れるものと、どうしてもそのようなものを超えてしまう部分とがあるという事実と直面せざるをえないのである。そのような知の在り方を中村が近代科学と比較して呈時しているため、それを参考にしたい。

中村によれば「臨床の知」とは、近代科学のように「ただ客観的にものを眺め、分析する」のではなく、「自分が現場にコミットして相手との関係の中で考える」ような知の在り方であり、文化人類学や精神医学や臨床心理学の領域で注目されているものである。近代科学と臨床の知を対比して捉えると、前者が客観主義であるとすれば、後者は身を以てコミットすることであり、普遍主義に対してはコスモロジー、分析的な在り方に対してはシンボリズム、ツリーに対してはリゾーム、意識に対しては無意識、意識的な「自我」に対しては無意識も含んだところの全体性を示す「自己」、言語に対しては前言語状態が対置されるという<sup>15)</sup>。

1-3 で述べた「三人称心理学」と「二人称心理学」との対比も、近代科学と臨床の知の対比として捉えられるであろう。「二人称心理学」は本来リゾーム的であり、「三人称心理学」のツリーの構造とは異にしている。しかしながら、リゾームを捉えるには、「ツリーのでないもの」として、つまり、三人称的心理学や近代科学では捉えられないものとして、欠如的に自覚することしか本来できない。つまり、法則的な定式化とそうでない部分を常に揺れ動き、見方を変えようとすることによってしか把握できないものなのである。このように考えてくると、とりわけ見方を自由に変更していこうとする現象学的還元態度が心理療法において必要不可欠であることが理解されるのである。

本稿においては、法則として捉えられないような心理療法の本質とかわる理解を求めて考察してきた。それは「共なる体験」として述べるができるようなもの



であり、またそれは近代科学の在り方とは非常に異なるものであることが示された。心理療法がその実践において治療者に感じられる本質直観を無視して一面的に近代科学という在り方のみによって自らを説明しようとするれば、治療における事象を把握しえないだけでなく、そこに現われる人間の姿をも歪めて捉え、矮小なる存在として人間を見ていこうとする動きを自らのうちに持つようになることを忘れてはならないであろう。

#### 註

- 1) Rogers, C. R. はこれを empathic understanding として、パーソナリティ変化の必要十分条件であると述べている。Rogers, C. R. (1966) 伊東博編訳。ロジャーズ全集4。サイコセラピの過程。岩崎学術出版社。
- 2) 河合隼雄(1967) ユング心理学入門, 培風館. p. 133-135
- 3) Freud, S. (1912)(1983) 小此木啓吾訳フロイト著作集9。岩崎学術出版社。所収『分析医に対する分析治療上の注意』 p.82
- 4) 河合隼雄(1983) 精神の科学1 精神の科学とは。岩波書店。所収『無意識の科学』p. 237
- 5) Binswanger, L. (1947) (1967) 荻野・宮本・木村訳現象学的人間学。みすず書房。p. 194
- 6) 河合隼雄(1986) 宗教と科学の接点。岩波書店。P. 192
- 7) Binswanger, L. (1947)(1967) 前掲書 p. 234
- 8) *ibid.*, p. 242
- 9) *ibid.*, p. 247
- 10) 荻野恒一(1975) 心理学研究法 I. 東京大学出版会。所収『現象学的方法』p. 175
- 11) 木田 元(1980) 講座現象学1 現象学の成立と展開。所収『現象学とは何か』
- 12) Strasser, S. は自然科学における客観性は「科学的装置」によって達成されると述べている。例えば、それらは概念体系やモデル表象、研究技術やその解釈法、コントロールの方法などである。Strasser, S. (1962)(1978) 徳永・加藤訳 人間科学の理念。新曜社。
- 13) Progoff, I. (1973)(1987) 河合隼雄・幹雄訳 ユングと共時性。創元社。p. 85
- 14) *ibid.*, p. 193
- 15) 河合隼雄・中村雄二郎(1984) トボスの知。TBSブリタニカ。p. 171-172